

# 雑誌と民俗学史の視角

石橋臥波の『民俗』と佐々木喜善の『民間伝承』

小池淳一

Viewpoints of Magazines and History of Folklore Studies : “Minzoku” by Gaha Ishibashi and “Minkan-densho” by Kizen Sasaki  
KOIKE Jun'ichi

はじめに

①『民俗』の視界

②『民間伝承』の夢

おわりに―雑誌という問題系

## 【論文要旨】

本稿は雑誌を通して日本の民俗研究の形成過程の特徴をとらえる視角を追求しようとするものである。雑誌は、長く大学に講座を持たなかった日本の民俗研究にとって重要なメディアであり、研究の対象を登録し、資料を蒐集するだけでなく、課題を共有し、議論を深めていくためにも活用されてきたことがこれまでも指摘されている。

ここでは具体的に一九三三年に石橋臥波を中心に発刊された『民俗』という雑誌が大正のはじめに「民俗」研究の重要性を主張し、国文学や歴史学、人類学の研究者を軸に運営されていたことを明らかにした。さらに同時期の高木敏雄・柳田国男による『郷土研究』との差異が「民俗」を把握する方法意識の差にある点について考察した。

さらに一九三三年に発刊された『民間伝承』という雑誌を取り上げ、編集発行にあたった佐々木喜善が置かれていた状況や研究上の課題、雑誌刊行を支えた人脈について考察し

た。ここからは掲載された論考ばかりではなく、問答や資料報告を含む誌面の構成から、口承文芸を軸に東北を基盤としつつ事例の集積と論考とを共有しようとする姿勢を読みとることができた。

雑誌にはその編集発行に携わった人々の研究への構想力が結晶しており、それはこれらの雑誌も例外ではない。そしてこのことは、民俗研究の史的展開を考える上で重要である。これまでは長期的に成功を遂げた雑誌に注目する傾向があったが、どちらの雑誌も短命に終わったもののこれらからも汲みあげるべき問題があることが判明した。今後は雑誌を支えた読者とのコミュニケーションの近代的な特色や増写版といったメディアを生み出す技術との関係も考慮に入れて、雑誌を民俗学史の中に位置づけていく必要がある。

【キーワード】郷土研究、高木敏雄、芳賀矢一、増写版、メディア

## はじめに

二一世紀の今日、雑誌というメディアに対してはどのようなイメージが付与されているだろうか。創刊と休刊（廃刊）とが相次ぐめまぐるしい状況や、活字離れが指摘されるなかで、電子メディアの急激な浸透の影響も小さくはない。大まかに情報の器という側面からみても雑誌の機能と意味は変化を遂げつつある。

本稿は日本の民俗研究の歴史を遡って、「民俗」、「民間伝承」という名を冠して発刊されたものの短命に終わった二つの雑誌の分析を通して、民俗学の形成過程における雑誌が果たした役割とその可能性とを分析、検討してみたい。このことは民俗学史研究の一端であるが、単なる絶対年代に沿った揺籃期における試行錯誤として位置づけるのではなく、雑誌というメディアを通して規定されていく民俗研究の枠組みや特徴の淵源を探っていくことを絶えず意識して論を進めていきたいと考える。

日本の民俗学史における雑誌が果たした重要性について、たとえば、井之口章次は次のように述べる。「民俗学の成果は、まず雑誌活動の上にあらわれてくるのが普通であるから、中心的な雑誌の消長を通して、その足どりを見るのが、いちばん便利であり、また普通のとらえかたである。…（中略）…また中心的な雑誌にあらわれた論文や資料報告を通じて、その時期に傾向や関心の所在、また活躍した研究者を知ることができる」（井之口一九七七（一九六〇）…一九九）。これは常識的な見解のようにいて、重要な視点である。なぜならば、帝国大学等のアカデミズムのなかに講座、教室を持たなかった日本の民俗学は雑誌というシステムを軸に問題提起やテーマの発信、さらには資料の存在を周知したのであり、そのことが民俗学の性格に深く関わっていくことになるからであ

る。

雑誌はいうまでもなく、研究団体、組織の顔であり、その活動をさまざまなかたちで登録していく手段であった。そこで提出されているのは、個々の問題提起や資料にとどまらず、雑誌のなかに文字化された研究者とその集団の意識である。<sup>(1)</sup>

従来の学史研究においては、こうした指摘を受け止め、取り上げられる雑誌は、比較的長期間の刊行に成功したものが多く、そのこと自体が民俗学の歴史において考察を重ねるべき問題を含んでいる。一方で短命に終わった雑誌も少なからず存在し、それらの多くは影響力の点で評価が低く、試行錯誤の過程として簡略に扱われる傾向があることは否めない。しかし、短期間で刊行を終えた雑誌にも注目すべき提言や視点は見いだせるし、少なくともそれらは創刊時においては長期にわたっての刊行に成功したものと変わらない展望と熱意のもとに準備が進められたのである。<sup>(2)</sup>ここではその点を見失わないようにしつつ、雑誌が刊行された時代において「民俗」「民間伝承」という語に含意されていた認識を取り上げることとしたい。

本稿では、以上のような研究史とそこから指摘できる課題を意識しつつ、まず、一九一三年に日本民俗学会によって発刊された雑誌『民俗』を取り上げる。続けて一九三二年に佐々木喜善によって発刊された雑誌『民間伝承』を取り上げたい。どちらも短命の終わった雑誌であるが、それでも、あるいはそれゆえに民俗学史における雑誌の特徴をよく示しているように思われる。そして両誌の分析を通して改めて雑誌研究の視角について最後に整理、提言を試みたい。

### ①『民俗』の視界

## (一) 日本民俗学会の設立と『民俗』の発刊

大正二年（一九一二年）五月五日の夕方五時、東京帝国大学の山上集会所において、ある会合が開かれた。日本民俗学会の発会式である。

言うまでもなく、この日本民俗学会は現在の日本民俗学会、すなわち、民間伝承の会を母体として、民俗学者の全国組織として続いてきているものとは全く別の組織である。翌年刊行され、本稿の分析対象でもある雑誌『民俗』もこの一九一二年の日本民俗学会を基盤として刊行されたものであった。

この日本民俗学会の発会式の様子は『民俗』の第一年第一報の「会報」欄に紹介されている。それによると「先づ、首唱者の一人石橋臥波氏学会設立の次第と希望とを述べ、次ぎて、文学博士芳賀矢一氏民俗学の研究の必要性和趣味との関係を述べ、次に理学博士坪井正五郎氏の「ふんどし」に就きての趣味多き講演あり、最後に文学博士白鳥庫吉氏の「韓族のASYLUMに就きて有益なる講演あり、終はりて晩餐会を開きぬ。同趣味者の賛同として、彼の方よりも此の方よりも、珍談湧き出て中々の盛況を呈しぬ。」<sup>(3)</sup>といった有様であった。

芳賀矢一、坪井正五郎、白鳥庫吉といった博士たちが次々と登壇し、彼らの専門が国文学、人類学、東洋史学といったものであることから、この日本民俗学会が帝国大学の知の権威にも支えられた学際的なものであったことをうかがうことができる。

続けて「会報」欄には当日の参会者の氏名が掲げられている。それは、

芳賀矢一、白鳥庫吉、坪井正五郎、関根正直、加藤玄智、三宅米吉、高橋健自、和田千吉、柴田常恵、森治蔵、富士川游、白井光太郎、関保之助、村川堅固、加藤咄堂、大島居弁三、喜田貞吉、高木武、古谷清、太田謹、笹川種郎、篠田周之、栄田猛猪、中村久四郎、補

永茂助、白石正邦、沼田頼輔、前田儀作、野村八良、高野辰之、山中笑、岩瀬良尾、永井如雲、高木敏雄、石橋臥波、三井定治、水谷幻花、佐々政徳、赤川菊村、井上勝好

の四〇名に及んでいる。当時まで、そしてその後の参会者たちの活動を一人一人、取り上げるゆとりはないが、登壇した帝国大学の博士たち以外にも、明治大正期の多彩な顔ぶれが集っていたことが分かる。民俗学の形成過程の観点からすれば、当時『郷土研究』を柳田とともに編集していた神話学の高木敏雄や甲寅叢書で『植物妖異考』を刊行する植物学の白井光太郎の名が目をひく。もちろん、有職故実研究の関根正直、宗教学の加藤玄智、歴史学の三宅米吉、喜田貞吉、沼田頼輔、国文学の野村八良といった名にも注意しなければならないだろう。

ここからは逆に、柳田國男の名がないことの方が不自然な程の顔ぶれであるということを指摘しておいた方がよいのかもしれない。こうした動きに対して柳田の心中はどういったものであったのか、推測する材料がないので何も確固たることは言えない。ただ全く、没交渉で蚊帳の外に置かれたというわけではなかったと推測することは許されるのではないだろうか。

『民俗』第一年第一報には「日本民俗学会設立趣旨」という文章も掲げられている。会の「概則」なるものも含み、ここに集った人々の問題意識や関心の所在を伺うには絶好のものと思われるので、いささか長くなるが掲出しておきたい。

我が日本民族に関する各種方面の研究は近時漸くその歩を進めつつあるも、その精神生活及び物質的生活の全方面に互りて、之を民俗学的及び人文史的に研究する即ち所謂最広義に於ける民俗学的研究に至りては、尚未だその緒に就かず、我が学界の為に一大恨事とする所な

り。惟ふに我が民族は単一なるものに非ざるが如く、従つて民俗文化の基く所甚だ複雑なるものあり、加之、古来の習俗、伝承等年に湮滅し月に変化しつゝあり、今の時に於て之を蒐集し攻究せずんば、將にその旧態を止めざるに至らんとす。此に於て同志相謀り、『日本民俗学会』を設立し、以て我が民族の由つて来る所、文化の基く所を究め、国民の性情を明かにし、聊か日本民俗の研究に貢献する所あらんことを期す。

#### 日本民俗学会概則

一、本会は日本民俗学会と名づく。一、本会の目的は、日本民族の精神的生活及び物質的生活の全方面に互りて、古来民間に行はるる信仰、思想、風俗習慣、伝説、童話、俚謡、俗諺、美術、工芸及び経済的方面に就きて、之を民俗学的に研究するに在り。一、前項の目的を達せんが為に本会は左記各種方面に互りて漸次研究の歩を進めんことを欲す。(一) 民間宗教及び信仰 (二) 民間風習及び生活 (三) 民間文学及び工芸。一、前記各種の攻究に従事し、若くは之に興味を有する人にして本会の目的に賛同する人は本会々員たることを得。一、前記各種の攻究に従事する人、若くは之に興味を有する人にして特に本会の事業を翼賛する人を賛助員とす。一、本会に左の役員を置く。評議員若干名、幹事若干名(内一名を主幹とす) 一、評議員は本会重要な事項を審議す。一、幹事は本会の庶務を処理す。一、本会は左の事業をなすべし。(一) 定期に研究会を開く。(二) 臨時に講演会を開く。(三) 定期に機関雑誌を刊行す。一、各地に出張して材料の蒐集取調をなす。一、本会は雑誌『民俗』を准機関として会員に無代配布す。一、本会々員は本会の集會に出席して研究の報告をなし、且意見を述べぶことを得。一、本会々員は、会費として当分一ヶ年金六十銭を納むものとす。一、本会事務所は当分東京市小石川区原町二十三番地に置く。<sup>(4)</sup>

雑誌『民俗』はこうした組織の「准機関(誌)」として発刊されたのであった。『民俗』はあくまで「准機関誌」であり「機関雑誌」は別に刊行する計画があつたらしい。しかし、実際には刊行に至らなかつたため、「准機関誌」と「機関誌」の差は問うことができない。憶測をすれば、『民俗』が広告等が多く、商業的成功も意識している編集方針がうかがえるだけに「機関誌」はより学術的な色彩を強める計画があつたのかもしれない。さて、設立趣旨からは、調査が急を要することが叫ばれ、概則からは、『民俗』誌に集つた人々の民俗の領域の具体的な内容を読みとることが出来る。それは、信仰、生活、文学・芸能の三つからなるとされており、研究の組織も具体的に示されている。実質的にこの組織を牽引したのは、事務所が置かれている住所に住む石橋臥波であつたであろうことも容易に理解できる。

#### (二)『民俗』の創刊と『郷土研究』の対応

このような『民俗』に込められた研究方針は先行する試みがあつたこととはよく知られている。それが、今日、民俗研究を雑誌というシステムで推進したとされる柳田国男、高木敏雄による『郷土研究』で、それは大正二年(一九一三)三月一〇日の創刊であつた。

その目次は【写真1】のようなもので、巻頭に高木敏雄の「郷土研究の本領」が載り、柳田国男が川村杢樹、久米長目といった筆名を用いて巫女や山人に関する論考を執筆している。頁数も六四頁に及び、高木と柳田の周到な準備によって『郷土研究』が形作られていったことがわかる。

一方、『民俗』の創刊は『郷土研究』より、遅れること二ヶ月、先に確認した日本民俗学会の設立から、約一年を経た後のことであつた。その表紙および目次は【写真2、3】のようなものであり、横長の和本を模したのであろうか、縦十四・八センチ、横二十一・八センチほどの独



写真1 『郷土研究』創刊号目次

発刊が記事となつてゐる。<sup>(6)</sup> 文末の署名は「門太」とあるだけで、誰の執筆かは明らかにし得ない。ここでは『民俗』が日本民俗学会の会報として現れたことを「余程の難産であるが、生きて産まれたのは何よりも幸いだ。」とし、「年四回は少し物足りなく思はれるけれども「郷土研究」と或程度まで性質と目的との共通もあり、云はゞ兄弟分の雑誌である以上は、吾々は諸手を挙げて其創刊を祝し、兼て将来の健全なる発展を祈らねばならぬ。」とする。



特のかたちで世に現れたのである。表紙には「一富士二鷹三茄子」を描いている点もユニークなものであった。<sup>(5)</sup>

巻頭に掲げられたのは芳賀矢一の「民俗に就いて」であり、以下、九本の論説が載っている。総頁数は六十六頁で、『郷土研究』よりは大きくも頁数もかなり劣つたものであった。

もちろん、雑誌の内容を取り上げずにこうした外見や目次を云々することは、あまりにも表面的であるという批判を免れ得ない。その点については次項で、『郷土研究』の巻頭論文であつた高木敏雄の「郷土研究の本領」と芳賀矢一の「民俗に就いて」を比較することとし、ここでは先行していた『郷土研究』誌が、『民俗』をどうとらえていたか、を確認しておきたい。

民 俗 第(一)号 第(一)次 目 次	
本誌の任務	芳賀 矢一
日本民俗学会の設立	坪井正五郎
民俗に就いて	沼田 頼輔
ふんとしに就いて	伊 藤 嘉 矩
日本民俗の起源	志 田 義 秀
臺灣神話の一例	文 學 主 筆
朝鮮の七つ道具	伊 波 普 猷
島嶼生活(一)(八重山民話)	文 學 主 筆
民間現象の心理的研究	南 方 熊 楠
話 俗 隨 筆	柴 田 常 恵
松太郎に似たる支那の俗話	石 橋 臥 波
民間療法	
資 料	
◎人指石と愛アイヌ語、俗話、謎々(吉田 隆二)家移の儀式と口上(俣野と俗話(南松浦郡)◎民話◎待待◎向ふのちばさん◎ついでんこ(鹿見島)◎あとうさ(小島島民話)◎見が池(備後)	
雑 俎	
◎旅行に関する通信	
問 答	
数 件	
會 報	

写真3 『民俗』創刊号目次

しかし、その後の筆致はいささか辛口である。「兎に角、下らぬ議論や歯の浮くやうな説法に貴重な紙面を費やすのは、如何なる場合でも得策でないと云ふことは、特にこの種の雑誌に於て真理である。」といい、伊能嘉矩、志田義秀、伊波普猷、南方熊楠らの名を挙げ「何れも真面目な読物である」と評する一方で、芳賀矢一の巻頭論文「民俗に就いて」には全く言及せず、黙殺していることは、注意しておいてよいだろう。芳賀の総論的な論説を敢えて無視するところに『郷土研究』誌の主張を

読み取ることが可能かもしれない。

そして、両誌をそれぞれ、次のように規定する。「一方は会員組織の団体の機関誌として、一方は同趣味者の精神的自由結合の独立雑誌として、その色彩と傾向とに於て、大に趣を異にしてゐるだけに、互に奨励裨益する所も多く、従つて目的の事業に貢献することも少なくはあるまいと思ふ。」と結んでいる。

『郷土研究』が同じ趣味の者たちが集う自由結合の独立雑誌であるのに対して、『民俗』を会員組織の団体の機関誌としていたのである。ここで『郷土研究』をあくまでも独立雑誌であるといい、『民俗』は団体あつての雑誌であると位置づけるのは、その後の民俗研究の展開を知る者にとっては深読みが可能である。『郷土研究』は基盤となる組織や団体なしに、高木敏雄と柳田国男の編集、一年後には柳田の個人編集となり、雑誌の傾向が統一されていく―その間に著名な南方熊楠とのルーラル・エコノミー論争が織り込まれるが―のに対して、『民俗』は僅か五冊で消えていくからである。多くの賛同者、それも帝国大学に関係する学者たちによつて構成されていた団体の機関誌であつたにもかかわらず、あるいはそれ故に短命に終わった『民俗』に対して、『郷土研究』は、独立雑誌として紆余曲折はあるにしろ、四年にわたつて月刊での刊行が継続され、雑誌の編集という近代的な様式を通して、柳田国男のめざした民俗研究をかたちに残していくのであつた。

### (三)『民俗』における「民俗」の問題

『民俗』を、日本民俗学会の機関誌もしくは会報として、研究者組織を背景に持った媒体として考えることは実のところ、適切ではないのかもしれない。ほぼ同じ目的とかなり多くの共通する執筆者を持っていた『郷土研究』が精神的自由結合の独立雑誌といった自己規定をしたことからもうかがえるように、民俗研究に専念し、それを看板として掲げる

研究者などどこにもいない時代であったことをふまえておく必要がある。<sup>9)</sup>

日本民俗学会という学会組織が名目の上では設立されていても、多くの構成員はそこを各自の学術活動の場としていたわけではなく、帝国大学をはじめとする他の学問を本拠とし、民俗研究の成長や成果に期待する者ばかりではなかっただろうか。

そうした点からすると、日本民俗学会の幹事をつとめ、実質的に『民俗』の編集、発行に携わっていた石橋臥波の関心のありかを探っておくべきだろう。しかし石橋臥波については明らかになっていることがあまりにも少ない。『民俗』の発行所が人文社であり、住所が東京市小石川区原町二十三番地となっている。この住所が石橋自身の住所と一致していることから、日本民俗学会という組織も実態は石橋個人の活動を権威づけるもので『民俗』も石橋の個人誌としての性格が強かったのではないかと推測が可能である。それは前項で比較した『郷土研究』が柳田の個人の活動を反映していたことと同じ図式である。

ただ石橋の問題関心や民俗研究に込めた思想は、柳田のように成功したわけではないだけに探るのはきわめて困難である。<sup>8)</sup>石橋の著作のうち、今日、比較的容易に参照できるのは、『鬼』であろうか。この書物は志村有弘編集の『庶民宗教民俗学叢書』の第一巻（志村編一九九八）に収録されている。ここで石橋は「鬼の研究に就きて」として「予、年来我が国民文化の由つて来る所を究め、我が民族思想の変化せる跡を明かにせんことを志し、鋭意之が材料を蒐め、求むるに従ひて、類を推し、項を分ち、略々その系統を立つることを得れば、則ち之を編して鬼となし、夢となし、以て世の同好の士に頒つ。」と述べている。

ここでは「民俗」という語は出てこないが、「国民文化」「民族思想」の史的な追究を鬼というテーマで試みた、というのである。雑誌『民俗』の刊行はこうした認識を持つ人物によって推進されたのであった。

しかし、『民俗』の創刊にあたって巻頭に据えられたのは石橋の論説ではなく、芳賀矢一によるものであった。題して「民俗に就いて」。その内容を見よう。<sup>10)</sup>

芳賀はまず、民俗に包含される領域について、一国の国体も、政治も、法律も、社会のあらゆる組織は一面から見れば民俗の反映であるとする。そして「民俗の研究は専門的であると同時に、普通的である。：（中略）：其等の学者の基礎となる民俗の研究は亦多くの素人によつても供給せられなければならない。各種の専門家は互に助け合つて民俗を研究すべきと同時に、専門家以外の物数寄な人もあつて、其の材料を供給することが必要である。」と論じる。これを採集の重要性を説いているとして評価する見方もある（大藤一九九〇・二五）が、むしろ他力本願的に、この当時の段階においては民俗研究の専門性を保証する者は誰もいないことを暗示しているようにも思われる。

そして、『郷土研究』に言及し、「本誌（すなわち『民俗』のこと——引用者注）と兄弟のやうなものである。相助けて、どうか此の種の研究の盛になるやうにしたいとおもふのである。」と述べている。先に『郷土研究』誌の「雑報」欄に紹介された『民俗』に関する記事の「兄弟分の雑誌」という表現はこの芳賀の言葉に対する反応であったと思われる。先にも述べたようにこうした芳賀の総論風の提言に対して、やや醒めたような応対をし、具体的に名前をあげることなく、ごく一部の表現を取り上げて、その多くを『郷土研究』誌は無視したことを改めて確認したい。

『民俗』と『郷土研究』との差異をさらに確認するために、『郷土研究』の創刊にあたって巻頭に掲げられた高木敏雄の「郷土研究の本領」を参照しておこう。<sup>10)</sup>ここで高木は「人間生活の地盤は土地である。」と開口し、民族の文化は生活の舞台を度外視しては理解できない、と述べている。そして文献学的研究の欠陥として民族生活の根本的研究が意識されてい



ないと指摘する。これは『民俗』における芳賀の大まかな民俗研究の必要性和大差のない概説であるが、末尾近くになって「郷土研究の目的は、日本民族生活の凡ての方面の根本的研究であるから、この民族生活の舞台であり、同時にその発展の要件である郷土すなわち土地の研究は、この研究の必須要件である。土地の研究は、土地そのもの、研究ではなく、民族の郷土としての土地、民族生活を左右し、且つ左右される土地、換言すれば民族生活に対して相互作用の關係に立つ土地の研究でなくてはならぬ。」とその研究対象を郷土と設定する。こうした具体的な研究が注視し、展開するポイントとしての郷土——もちろん、郷土研究とは何ぞや、という問いがそこでまた問われねばならないのだが——を明示している点に芳賀との差異があるといえるだろう。

『民俗』は石橋の病氣（荒井一九八八・四四七）や財政難などがあったにしろ、誌面の構成としては細かな事項を扱う「雑俎」や問題を提起し、広く反応、解答を募る「問答」など『郷土研究』とそう大きな違いはない。あるとすれば、『郷土研究』の定期的な刊行であり、さらにここで確認したように、一足飛びに「民俗」を対象とするのではなく、まず「郷土」を第一に見据えよ、とする、研究の着眼点への配慮ではなかっただろうか。

逆に言えば、『民俗』の失敗とその原因は、郷土を通さないと民俗は対象化できない、という方法意識の欠如であった。そうした認識が不十分であり、揺籃期の民俗の研究において、学者以外の人々の参加を容易にする具体的な窓口を提示できなかった点に『民俗』の問題が端的に表れていると言えるだろう。

## ②『民間伝承』の夢

### （一）仙台の佐々木喜善―雑誌『民間伝承』の刊行

次に、『民俗』と『郷土研究』の登場から二十年近く過ぎた時点での雑誌を取り上げてみたい。それは佐々木喜善によって刊行された雑誌『民間伝承』である。

『遠野物語』の誕生に深く関わった佐々木喜善<sup>(1)</sup>は、昭和六（一九三二）年、居を故郷の岩手県土淵村から仙台へと移した。喜善はそれまで務めていた土淵村の村長を辞し、新たな展開を期しての転居であった。ここから喜善の早い晩年の苦闘が始まるのだが、ここでは、あくまでも雑誌研究の観点から『民間伝承』に焦点をあてて考えていきたい。

雑誌『民間伝承』を取り上げるのにはいくつかの理由がある。民俗学の歴史からすると、この雑誌は誌名に「民間伝承」を掲げた最初のものであり、その点では前節で論じてきた雑誌『民俗』と同様に、民俗研究の営みの目標を「民間伝承」に据える先駆的なものであるといえる。またその内容は今日の「民間伝承」とはやや異なる内容を持っており、そのことも雑誌『民俗』と時代は異なるものの、その差異やずれを確認することが民俗研究の対象が確定されていく過程を検討するために重要であると考えられる。

さらに後述していくように、この雑誌は柳田國男とも微妙な距離を測りつつも、仙台において雑誌の編集・発行を通じて民俗研究に貢献しようとした佐々木喜善の志向と用意、そしてそれを支えると考えられた諸条件を検討する材料としても位置づけることができる。この雑誌が刊行された昭和七年（一九三二）前後は、多くの民俗、郷土に関する雑誌が生まれていた。佐々木喜善の『民間伝承』もそうした大きなうねりのなかに位置づけるべきである。しかし、大きなうねりの分析といっても、それを構成するひとつひとつの要素を確かめることからしかその作業は可能にならない。昭和のはじめの地方ごとの研究の志向とその具体的な



作業成果としての雑誌を考えていくための最初の作業として『民間伝承』を取り上げてみたのである。

雑誌『民間伝承』は後にふれるように佐々木喜善とその家族によって、すなわち研究者としては佐々木喜善の独力によって刊行された。第一号は昭和七年三月一〇日の発行で、謄写版による印刷であった。総頁数は六八頁である。【写真4】のような表紙を備え、この「母子泣き石」が描かれている表紙は第二号でも踏襲されている。創刊号、第二号ともに大きさはタテ二三・〇センチ、横十五・五センチである。

喜善は、詳細な日記をつけており、既に全集第四巻（遠野市立博物館編二〇〇三）に収録されている。ここでは、昭和六年十一月二十六日の条に「今日いよいよ謄写版の雑誌の趣意書を作り、計画を具体的に立て、見た。金二十円あれば出来ると思ふが、それがないのが悲惨である。」「遠野市立博物館編二〇〇三：五三二」という記述を見いだすことができる。同月十七日に仙台の成田町に転居し、新しい住居での新たな仕事として金銭的には苦悩しつつも、意気込んで開始した作業であったと見なすこ

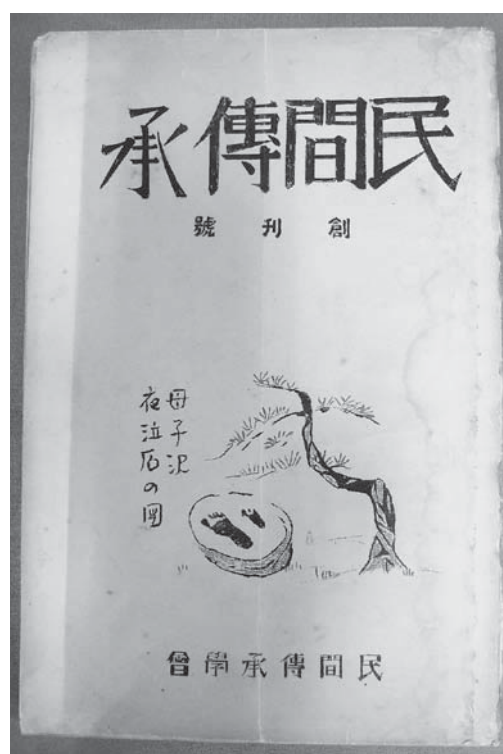


写真4 『民間伝承』創刊号表紙

とは許されるだろう。

そしてその計画は十一月三十日の日記に「まづ、柳田先生へ雑誌計画を書いて出した。其他同様の手紙を中山太郎氏、折口信夫氏、金田一京助氏へ、…（後略）」（遠野市立博物館編二〇〇三：五三二）と記されていることから、柳田国男への起業およびその計画の提出があり、年来の知己で、研究上の付き合いがあった研究者たちへの協力依頼もなされていたことが分かる。創刊に至るまでの細かな経緯は次項で検討することとして、この雑誌『民間伝承』が形となったのは翌年三月であった。その創刊号の目次は以下のようなものである（括弧内は筆者名）。

- 郷土と言語と伝説（金田一京助）
- 昔話と言葉（小井川潤次郎）
- 東平王塚の研究（藤原相之助）
- 平泉の延年の能（小寺融吉・本田安次）
- 東三河の昔話（早川孝太郎）
- 角館昔話（武<sup>マタ</sup>鉄城）
- 岩泉の昔話（一）（野崎君子）
- 御覽大明神（中村協平）
- マイワイと呼ぶ衣服（宮本勢助）
- 花咲爺の話（佐々木喜善）
- 成田町から

巻頭の金田一の論考は「郷土の言語と伝説」が正しいタイトルであるが、目次ではまちがっている。

発行母体（発行所）は民間傳承學會となっているが、佐々木喜善個人に過ぎなかったことはこれまで述べてきた通りである。そうした状況下で、佐々木に協力を申し出、実際に創刊号に寄稿した人々の存在は喜善

の孤立を救う光明のような存在でもあっただろう。

その間の事情は創刊号のいわば、編集後記としての性格を持つ「成田町から」にうかがうことができる。「私は、自分の心覚えの手帳の代りに何か雑誌様のものを出さうかなと思つた動機は、去年の二月に青森八戸の方へ講演に行つた時、小井川潤次郎氏から座談中、君はどうして雑誌を出さぬか、と云はれた時に芽生した。」とあり、「又矢張り去年の春かに遇々旅行帰りに早川孝太郎氏が、川内（当時の喜喜の住まい―引用者注）に御立寄下された際、何か民間伝承の蒐集の手紙代りに謄写版刷でも出して見やうか等も説して見た。それから六月頃三原良吉氏に話したら、それは是非出したらいい、そして君の生活を明るくしたら……と云ふのであつた。」（遠野市立博物館編一九九二・八〇）と続けられている。ここで名前が挙げられている。小井川潤次郎、早川孝太郎、三原良吉といった人々とのつながりが雑誌『民間伝承』をかたちにする直接のきっかけであつたことがわかる。そしてこの三人のうち、小井川と早川は原稿を、三原は表紙の絵を寄せて創刊号を飾つたのであつた。

創刊号と続けて五月に刊行された二号の巻末には「賛助員御芳名」として、この事業を主として金銭面で応援したであろう人々の名も掲げられている。それも引いておこう。まず、創刊号には、

一力五郎氏（仙台）／新田貞雄氏（岩手）／山本格蔵氏（仙台）／箱石澄司氏（函館）／北川貞澄氏（岩手）／天沼俊彦氏（東京）／島倉吉氏（岩手）／宮本勢助氏（東京）／中村協平氏（静岡）（／は改行を示す。以下同じ。）

と記され、二号には、

佐藤吾一氏（仙台）／井上日徳氏（仙台）／松田亀太郎氏（岩手）／田

中とく子氏（仙台）／柳田國男氏（東京）／澁澤敬三氏（東京）／村田幸之助氏（岩手）／関徳彌氏（岩手）／松本克子氏（岩手）／川合祐六氏（盛岡）

と合計、十九人の名が記されている。宮本勢助、柳田國男、渋沢敬三の名らが注意を引くが、それ以外の、例えば井上日徳は喜喜の主治医であつたことから、民俗研究者ばかりではなく喜喜の周囲の人々が、何とか『民間伝承』の刊行事業をより立てようとし、協力しようとしていたということができるだけだろう。

なお、創刊号には「會員諸氏へ一言」と題された紙片が挿入されていて次のように記されていた。「『民間伝承』創刊号を差上げるに際して体裁内容共に甚だ相整はず、又本文多くの誤字誤記あり、甚御判読に苦まれる条々ありますが、之は印刷の關係上私の校正が充分行届かなかつた咎で、何とも恐縮に存じ、御詫びを申し上げます。次号で正誤訂正を致します故何卒御諒察を御願ひ申し上げます（佐々木喜善）」。ここからは何とか発刊にこぎ着けたものの、喜喜の苦衷を察することができる。

二号も同じく謄写版による刊行で、総頁数は五〇頁である。その目次は、

湧き出る水の祥瑞（出口米吉）

妙な昔話（小井川潤次郎）

猿の顔の赤い譚（中西利徳）

花咲爺の白い犬（加藤嘉一）

郷土の言語と伝説（完）（金田一京助）

東平王塚の伝説（完）（藤原相之助）

平泉延年の能（小寺融吉・本田安次）

はたをり（大償神楽白本）

民譚問答

仙台より（編集後記）

彙報

で、架蔵のものは本文が茶色（セピア色）で刷られている。目次には「彙報」とされているが、実際には最終の五〇頁に「会報」として藤原相之助の『奥羽古史考證』が刊行されたことの紹介が行われているだけである。「仙台より」で創刊号の誤字に対する後悔とそのため二号では喜善自らが六十頁全部を書いてみて失敗し、病気になったことなどが記されている。編集の過程で身辺に起きた出来事や聞き知った民俗的な情報なども記され、最後に「三号は五月十五日頃には諸氏のお手許へ御届する。」と結ばれている。しかし、第三号は喜善自身の死によって刊行されることはなかったのである。

（二）一九三三年の民俗学界と『民間伝承』の意義

佐々木喜善によって『民間伝承』が発刊された一九三三年という年は民俗学にとってどういう時期であったのだろうか。他の雑誌では『旅と伝説』五年目に入り、折口信夫らを中心とする民俗学会による『民俗学』は四巻目を数えていた。また『民俗芸術』も四巻目を迎えていた。前年には『郷土研究』も復刊され、民俗研究の興隆、展開が図られていたといってもよいだろう。そうしたなかで、中道等らによって『俚俗と民譚』がこの年の一月には創刊されている。

この雑誌については、柳田國男の伝記研究の過程で興味深い指摘がなされていることに立ち止まっておきたい。それは当初、この『俚俗と民譚』は『民間伝承』という誌名となるはずだったというのである。しかし、佐々木喜善が同名の雑誌を計画していることから『俚俗と民譚』に落ち着いたのだという（大藤一九九〇・二一七）。また後年には一誠社が『民

間伝承』という雑誌を計画したこともあったという（戸塚一九八八・八五七―八五八）。このことから、『民間伝承』という雑誌は当時の民俗学界において誰が出してもおかしくない状況であったこと、そのなかで佐々木喜善に対する敬意あるいは遠慮の感情が働いたらしいことがうかがえる。

我々は、やがて昭和十年（一九三五）の日本民俗学講習会を経て、民間伝承の会が結成され、学会の機関誌、会報としての『民間伝承』が生まれることを知っている。全国組織が結成され、雑誌も学会誌として順調に成長していったことを念頭におくならば、佐々木喜善の決して立派とはいえない、たった二冊の『民間伝承』は、取るに足らないもののように扱ってしまいたくなるだろう。しかし、『民間伝承』は昭和のこの時期においては民俗研究の汎称として、そして柳田とともにそうした研究を切り拓いてきた佐々木喜善にのみ、結果的にとはいえ許された雑誌名ではなかったかと思われるのである。

そしてそのことは、「民間伝承」の名のもとに、民俗研究の情報が結集され、活用される体制が熟しつつあることを示すものでもあっただろう。喜善の個人的な努力によって刊行された『民間伝承』はそうした民俗研究の成熟を先駆けて示した雑誌という位置づけが可能なのである。

そうした状況のなかで、実際の『民間伝承』は、前項で掲げたような寄稿者によって出発したのであった。その特徴は、佐々木喜善自身が口承文芸とその周辺に強い関心を持っていたことから、その領域の内容にほぼ集中しているということであろう。例外は創刊号の宮本勢助のマイワイに関する論考くらいで、残りは口承文芸、芸能、信仰といった内容の報告や論考、課題提示であった。喜善の興味の範囲、交友の範囲をさらに絞り込んだ内容となっているのは改めて確認する必要があるといってもよい。

例えば、創刊号にコラムのようなかたちで書き込まれている「蒲原の

昔話」(二八頁)は文野白駒(岩倉市郎)の『加無波良夜譚』に寄せた喜善の感想である。それはさらに「越後の花咲爺譚」(四七頁)において喜善が関心を持っていた一つの話型を摘録するという記事となり、巻末の論考「花咲爺の話」へと結実していく。興隆、成熟しつつある当時の民俗研究の状況のなかで、喜善が雑誌に込めようとしていたのは、こうした刺激(事例)と反応(論考)の場の必要性ではなかっただろうか。

それは、第二号から始められた「民譚問答」(四〇～四四頁)でも同様で、五十音順に民俗語彙や口承文芸に関する研究上の覚書が開陳されている。四四頁には(附記)として「此問答欄は、此号ではアの部のイまで話してみた。次号にはアの部のウから続けやうと思ひますから、民譚其他俚諺の類話を御垂教下され度く存じます。」とあって、喜善は「話」という意識を持って、この欄を設け、続けようとしていたことがわかる。

こうしたスタイルは民俗研究の雑誌には広く行われてきたもので、『郷土研究』の「紙上問答」、『民俗』の「問答」などと通じる面を持っている。雑誌を場として位置づけ、使おうという発想である。たった一人の、謄写版による刊行であっても、こうした戦略的スタイルを採用することができたことが、民俗研究をめぐる方法的な成熟の姿であったととらえるべきであろう。

前項で確認したように『民間伝承』を出す直接のきっかけとなったのは小井川潤次郎の徳憑、早川孝太郎のはげまし、三原良吉の応援であった。これを雑誌を支える経験的な知として整理するならば、小井川が謄写版という技術を、早川が東北という枠をこえる民俗研究の広がり可能性を、三原が絵という文字にとどまらない資料の集積と提示の方法を佐々木喜善にもたらしただけということができるだろう。

### (三) 終熄まで——佐々木喜善の日記から

こうした昭和初めの民俗研究全体の蓄積と経験の上に雑誌『民間伝承』

は成り立っていた。しかし、民間傳承學會「佐々木喜善に残された時間は、それを次の段階へと押し上げるだけのゆとりはなかった。

昭和六年十二月以降の喜善の日記(遠野市立博物館編二〇〇三・五三二—五八二)から『民間伝承』刊行に関わると思われる記述を抜き出してみよう。そしてそれによって、この雑誌の終焉を確認することとしたい。昭和六年十二月二十四日の条に「小寺融吉氏より「平泉の延年の能」が来る。」とあり、翌年に入ると「今日「母子沢の夜泣石」といふ伝説の原稿を脱稿した」(昭和七年一月七日)、「本田安次氏に小寺氏の原稿を送つてやつた」(八日)、「雑誌「民間伝承」の編輯で日をくらしした」(二十日)、「編集後記を書いて見た」(二十二日)といった具合に雑誌の内容は整っていく。

次に問題なのは印刷である。二月十六日に「謄写版にしよう」と決心して東七番丁と荒町に寄つてきた。」が、十九日には「謄写版を刷らせて見てとても駄目で、まず一号をば頼むことにした。」といういわば見切り発車のようなかたちでの刊行にふみきる。

そしてついに『民間伝承』が完成する。それについては三月五日に「妻の心で「民間伝承」が出来た。…また今夜「民間伝承」が全部出来上がるが、翌六日、印刷代を払おうとして喜善は「朝、青鳥社へ勘定などをする気になつて出る。荒町まで行くと、急にめまひがして来て倒れ、青鳥社へ駆け込みてたはれる。それから下駄屋へつれられて来て夕方まで寝る。」という体力を使い果たした状態であった。

しかし、喜善は再び立ち上がる。同月二十二日には「雑誌二号の印刷をしようと思ふて出る。七番丁から荒町の印刷屋へまわり、道具をかりて来る。」翌日には「謄写を書き出す。なかなか思ふやうに行かず、…」それでも二十八日に「今日は謄写を仕上げる。」そして三日後の三十一日には「今日で謄写を書き終つた。五十頁である。」が、気に入らない。



翌四月一日には「謄写二十五枚五十ページ書いたがとても文字がまづくて又あらためて書直さうと決心し」、第二号の刊行へと進む。そして四月の下旬には完成に近づいていく。二十七日には「謄写二号完結して光広へ青鳥社へやつた。」と記され、五月六日には第二号が出来上がった「ついでに青鳥社へ寄つて見る。雑誌が出来ていた。やつぱり文字は氣に合わないか仕方がない。」というのが喜善の感慨である。

繰り返し述べてきたように『民間伝承』は僅か二号で終わるが、喜善は没するまで、続刊を期していたことも日記に明らかである。昭和八年七月十九日の条には「駒木の佐々木和尚と話をしていた夢を見る。民間伝承の三号を出したこと、…」とあり、八月十四日には「中村協平氏死亡せる通知来る。遂に死せしと悲しく思ふ。民間伝承で追悼号を出さうと思ふ。」と記されている。そして喜善自身に死が唐突に訪れたのは九月二十九日の朝であった(佐藤二〇〇二:一二四、同二〇〇三:一三四)。

## おわりに―雑誌という問題系

以上、石橋臥波による『民俗』と佐々木喜善による『民間伝承』という二つの雑誌を取り上げて、雑誌を対象としてそこから導き出される民俗学史研究の視角について考えてきた。「民俗」あるいは「民間伝承」という術語を雑誌のタイトルに掲げたこの二つの雑誌はどちらも短命であったが、関連する諸事象を勘案すると一定の位置づけが可能ないように思われる。『民俗』が発刊された一九三三年には、「民俗」の重要性は認知されていたものの、それを取り上げ研究するフィールドの認識は共有されてはいなかった。それが「郷土」であるとし、雑誌のかたちで民俗研究の扉を開いていたのが、「兄弟」にあたる『郷土研究』であった。「民俗」を主題とした点においては共通しているながら、『民俗』の方は民俗学史においては周辺の存在に止まってしまったのである。

『民間伝承』も一九三三年に発刊された時点では、「民間伝承」研究の機運が高まり、その必要性は広く認知されていたにもかかわらず、編集発行人であった佐々木喜善の不運がそのまま投影され、その企図は十分に進展することなく、僅か二号で終焉を迎えることとなった。しかし、佐々木喜善の得意とする、口承文芸という領域、さらに東北という地域のなかで事例の共有とそれに基づく論考の提出の「場」の構築への志向をこの中に見出すことができる。

枢要な概念をタイトルに掲げ、機が熟していたと思われるにもかかわらず、『民俗』も『民間伝承』も所期の目的を果たすことはなかったのである。この二種の雑誌の挫折は、「民俗」や「民間伝承」を対象とする学の展開の最前線に登場したにも関わらず、その役割を果たしきれずに終わった点で共通する。しかし、それは試行錯誤と結果としての失敗と言わざるをえないものの、正面から当時の研究の潮流を引き受けようとした営為とも言えるのである。

本稿での検討から、民俗学史における雑誌研究の視点をいくつか導き出すことが可能である。まず、雑誌は、論文の発表の舞台という表面的な意味合いばかりではなく、誌面の構成には編集発行に携わった人間集団の研究への構想力が結晶している。特に民俗研究では、大学を代表とする近代の学問システムを相対化するような民俗事象の把握やデータ化、さらには理論構築の力学が働く「場」として雑誌をとらえていく必要がある。また雑誌を単独のメディアとしてとらえるのではなく、同時期の類似の雑誌と重ね合わせることで見えてくるものも少なくないであろう。さらに郵便や研究会組織などと連動するものとも考えることで、生活世界を対象化するシステムを意識していくことも可能であろう。

ただし、今回取り上げたような短命な雑誌の場合は、編集発行する側からの問いかけを読者たちがどのように受け止め、成長させていったか、といった問題に昇華させることは難しい。この点は対象を別のメディア

に移して考察するべき課題である。

雑誌を支える技術的な側面としては、謄写版の問題がある。現在ではほとんど用いられなくなりつつあるこの技術が、少人数を対象にし、地域も限られた活動のなかで果たした正負両面の意義を考えることは、近代日本の地域的な知をコミュニケーションの技術との相関の中でとらえることにつながっていくだろう。

そして、論文や学術書、学会組織だけではなく、調査報告や雑誌、任意の研究団体に対して、それらが果たしてきた役割に見合うだけの位置づけを模索することが民俗学史研究の共通の課題ではないだろうか。本稿はその第一歩を雑誌を糸口にして踏み出そうとしたものである。

## 註

(1) 真鍋昌賢は雑誌研究において重要な問題提起をしている。真鍋は雑誌『民俗芸術』を取り上げて分析を加える際に「：それぞれの雑誌に関与する経験は、その誌上でのみ展開するとは限らない。民俗学の運動体としての側面への注目を損なわないようにするならば、誌—上での読む経験を越えて運動する誌—外での経験をも射程に入れなければならない。民俗学において「雑誌」は、そうした多面的な経験を通して学問への認識を構造化していくメディアである」(真鍋二〇〇三：二五)とし、『民俗芸術』は、誌—上を中心としながらも、それにとどまらないレベルで『民俗芸術』の経験を組織するという、記録・保存・研究の運動体として出発した雑誌であった。対照と研究者の間を媒介する肉筆画・写真・キネマ・ラジオの可能性、また研究者間を媒介する誌上空間・実践空間の可能性を模索しながら、『民俗芸術』では研究対象の拡張が図られていく。(真鍋二〇〇三：二二二)と指摘している。これは身体を通じて表現される民俗を扱う領域に限定されるものではなく、文字に媒介されにくい文化を文字を通じて対象化し、共通の議論の俎上にのせていく民俗学という営みに宿命的につきまとう問題であり、方法である。

(2) 民俗学史のなかで、そうした観点から比較的良好に言及される雑誌に折口信夫が編集した『土俗と伝説』がある。これは『郷土研究』の後を継ぐ意図で折口が企画したもの(池田一九八二・一九八)であり、雑誌名や連載された記事内容には、当時の折口とその周囲の人々の民俗観、民俗学観が看取できる。その点については(小池二〇〇五)で分析を加えた。

(3) 『民俗』第一年第一報(一九一三、六五頁。引用に際しては、仮名遣いは原文のままとし、漢字については特に必要がないと判断される範囲で現行通用のものに改めた。以下、引用についてはこれを原則とする。

(4) 『民俗』第一年第一報(一九一三、二頁)。

(5) ただし、この意匠も雑誌そのものの継統が難しくなっていくときちゃんと継承されなくなっていく。第二年第二報(大正三年四月発行)では富士のみが描かれ、鷹や茄子は落ちてしまっている(写真5)を参照。

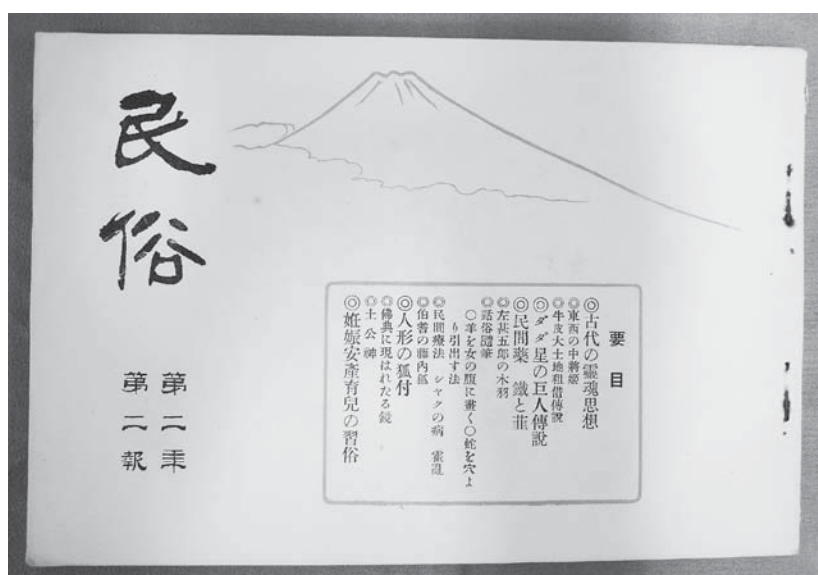


写真5 『民俗』第2年第2報表紙

- (6) 『郷土研究』第一巻第四号(一九二三)、六四頁。  
 (7) この問題については(山下一九八八・四一〇—四一九)を参照。  
 (8) ここでは管見に入った限りでの石橋の著作物をあげて、今後の研究にゆだねたい。『民俗』や『郷土研究』に掲げられた広告に注意することで、以下のような石橋の著作を見いだすことができる。刊行年に従って記すと、  
 『教育勸語釈義』(明治二四(一八九二)年刊、吉岡教育書房、筆者未見。以下特に記さない限り同じ)。  
 『学校管理法学校教授術学校教育学応用全書』(共著、明治二四(一八九二)年刊、盛文館)

- 『広島県郷土史談』(明治二七(一八九四)年刊、教育書房、教師用も同年刊)  
 『夢』(明治四〇(一九〇七)年刊)  
 『鬼』(明治四二(一九〇九)年刊、[志村一九九八]に収録)  
 『素人宗教観』(明治四二(一九〇九)年刊、人文社)  
 『国民性の上より観たる鏡の話』(大正三(一九一四)年刊、人文社)  
 『二十世紀大雑書 縁起辨 運勢辨 夢の辨』(大正二(一九一三)年刊、人文社)  
 『個人社会厄年の話』(大正二(一九一三)年刊、人文社)  
 『家庭学校子女の用心』(大正六(一九一七)年刊、東京宝文館刊、)  
 など十冊があり、刊行年がわからないながらも広告からは、  
 『出産育児の習俗』(刊行年不明、未見、広告による)  
 『新旧対照暦の話』(刊行年不明、未見、広告による)  
 『日用新旧暦の葉』(刊行年不明、未見、広告による)  
 といった著作もあることが知られる。

- (9) 『民俗』第一年第一報(一九一三)、三一—六頁。  
 (10) 『郷土研究』一卷二号(一九一三)、一一—一二頁。  
 (11) 『遠野物語』と柳田国男、そして佐々木喜善との関わり合い、そしてテキストとしての『遠野物語』の誕生に関しては論じ、考えるべき多くの問題がある。ここでの作業はそうした問題の存在を意識しつつも、あくまでも『民間伝承』という雑誌を見つめることに限定したい。近代日本における『遠野物語』の誕生については石井正己の『遠野物語の誕生』(石井二〇〇〇)を基軸として多くの研究が積み重ねられている。ここでは圧倒的な石井の業績を読み込むことが今後の『遠野物語』をめぐる多種多様な研究の大きな課題であることを確認するにとどめておく。

# 参考・引用文献

荒井 庸 一九八八「雑誌『郷土研究』」柳田国男研究会編著『柳田国男伝』…四

- 四五—四九三(三一書房)  
 池田弥三郎 一九八一「孤影の人―折口信夫と釈迦空のあいだ―」(旺文社「文庫」)  
 石井 正己 二〇〇〇『遠野物語の誕生』(若草書房)  
 井之口章次 一九七七(一九六〇)『民俗学の方法』(講談社「学術文庫」)  
 大藤 時彦 一九九〇『日本民俗学史話』(三一書房)  
 小池 淳一 二〇〇五「折口信夫と伝説研究」『国文学―解釈と鑑賞』七〇(二〇):一五—二二(至文堂)  
 佐藤 誠輔 二〇〇二『民間伝承』創刊と喜善の大往生(昭和七年〜八年)『遠野物語研究』六遠野物語研究所…一二二—一二四  
 佐藤 誠輔 二〇〇三『遠野先人物語 佐々木喜善小伝―日本のグリム―』(財団法人遠野市教育文化振興財団)  
 志村有弘編 一九九八『庶民宗教民俗学叢書1』(勉誠出版)  
 遠野市立博物館編 一九九二『佐々木喜善全集(Ⅲ)』(遠野市立博物館)  
 遠野市立博物館編 二〇〇三『佐々木喜善全集(Ⅳ)』(遠野市立博物館)  
 戸塚ひろみ 一九八八「民間伝承の会」柳田国男研究会編著『柳田国男伝』…八〇六—八六一(三一書房)  
 真鍋 昌賢 二〇〇三「経験としての『民俗芸術』―認識を構造化する仕掛けとしての『雑誌』―」『日本思想史研究會会報』二二…五一—一七(日本思想史研究会)  
 福田アジオ 二〇〇九『日本の民俗学―「野」の学問の二〇〇年―』(吉川弘文館)  
 山下紘一郎 一九八八「郷土会とその人々」柳田国男研究会編著『柳田国男伝』…三九五—四四四(三一書房)

(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了)  
 (国立歴史民俗博物館研究部)

## **Viewpoints of Magazines and History of Folklore Studies : “Minzoku” by Gaha Ishibashi and “Minkan-densho” by Kizen Sasaki**

KOIKE Jun'ichi

This article pursues viewpoints to understand the characteristics of the formation of Japanese folklore studies through magazines. Magazines are an important media for Japanese folklore studies, which have not been studied sufficiently in universities, but have been used for registering research subjects and collecting materials and also for sharing themes and deepening discussions.

This article reports that a magazine “Minzoku (Folklore)” published by Gaha Ishibashi and others in 1913 stated the importance of “folklore” studies in the beginning of the Taisho period and was operated mainly by researchers of Japanese literature, historical studies, and anthropology. The magazine was different from “Kyodo-kenkyu (Local Studies)” by Toshio Takagi and Kunio Yanagita in the same period in the consciousness of the method of understanding folklore.

Furthermore, this article deals with the magazine “Minkan-densho (Folk Tradition)” published in 1932 to study the situation of Kizen Sasaki in its publication, research themes, and his personal support of its publication. Here, the attitude of sharing the accumulation of case examples and discussions focusing on oral literature in Tohoku as a base is read not only in the published discussions but also in the structure of the magazine including the Q&A and reports on materials.

In magazines, the power of imagination toward research of people who were engaged in publication is crystallized. These two magazines are not exceptions. It is important to consider this when thinking about the historic development of folklore studies. Conventionally, magazines that were successful in the long run attracted attention. However, both of the above magazines, which did not last long, covered important issues. From now on, it is necessary to position magazines in the history of folklore studies in consideration of modern characteristics of communication with readers who supported magazines, and the relationship with technologies that produce media like mimeographs.

Key words: Local studies, Toshio Takagi, Yaichi Haga, mimeograph, media